

令和元年度 高浜市立吉浜小学校の取組

学校教育 目標	強いからだと美しい心をもった児童を育成する。 ○考える子 ○健康な子 ○素直な子 【目指す子ども像】 「ふるさとに誇りをもち、 ともに学んで未来を拓く吉浜っ子」	〈学校の使命〉 自立した大人になるための基盤をつくる。 〈経営展望〉 自信と希望をもって中学校へ進むことができる学びを保証する教育を追究し続ける学校である。
------------	--	---



教職員（組織）の 姿	① 常に「児童の学びを保証する」ことを念頭に置き、日々の教育活動に取り組む教職員である。 ② 日々研鑽を重ね、協働し、互いに高め合うことができる教職員集団である。 ③ 教育公務員としての自覚をもち、児童に対し率先垂範する教職員である。
---------------	---

経営展望実現に向けての現状と今年度の位置付け	本校の児童が、地域の一員として自立した大人になるための基盤を育み、中学校へ自信と希望をもって進むことができるために、「ふるさとに誇りをもち、ともに学んで未来を拓く吉浜っ子」（2年次）を目指す子ども像とする。伝統文化の盛んな吉浜地区で、地域の方々と関わりながら児童期を過ごすことは、将来、自立して社会で役立つ人材となるための基盤になると考える。引き続き、地域の方々とともに児童の育成に取り組む。 昨年度は、四つの経営方針の中で、第1の柱に授業力向上に関わる主題研究の取組を据えた。主体的・対話的で深い学びのある授業研究を進めた結果、主体的で深い学びのある授業については大きな成果があったが、対話的で深い学びのある授業については、まだ伸びしろがあることが分かった。そこで、今年度は、次年度の新学習指導要領本格実施に向けて、更に授業研究を追究する。子どもの具体的な姿として「①ともに学びを深めようとする子 ②主体的に活動できる子 ③感謝する心をもつ子」を掲げる。 今年度も、学びを保証する教育を追究し続ける学校であるために、「授業力が向上する主題研究体制の構築」「目標管理による学年・学級経営の展開」「児童の主体的な活動を育む支援体制の強化」「地域の方々とともに地域愛を育む教育活動の構築」の四つを学校経営の柱とし、PDCAサイクルを活用して高めていく学校体制を築く。
------------------------	---



経営方針とその考え方	① 授業力が向上する主題研究体制の構築	主体的・対話的で深い学びのある授業研究を引き続き進める。主題研究推進委員会を中心にした、教職員の授業力の向上を、経営展望実現に向けての第1の柱とする。 ・年2回の全体授業研究を中心に、各学年の代表による公開授業を1回行い、主題研究をマネジメントする。 ・「教員の自己評価3段階」及びその結果を、主題研究のマネジメントと各教職員の授業改善に活用する。 ・朝の読書、聴き方・話し方の指導、学習の振り返り活動、深い学びに導く主体的・対話的な「学びの流れ」による単元構想を継続する。さらに、対話のスキルを身に付けるためのスピーチ活動を行い、建設的相互作用のある対話を取り入れた授業づくりを進める。
	② 目標管理による学年・学級経営の展開	安定した学級経営があればこそ授業の質を高めることができる。また、授業での学びの高まりが学級を成熟させる。6年間の児童の成長を見据え、各学年末での児童のあるべき姿を目指し、児童の成長をつなげていく学年・学級経営が、経営展望実現に向けての第2の柱となる。 ・安定して授業の質を高められる学級に育てるための学級経営上の課題と目標を明確にするとともに、児童にとって居心地のよい安心な場所となる学級に育てるため、現状を振り返り、手だてを更新し、PDCAサイクルで学年・学級経営を進める。 ・さまざまな交流活動等を通して、児童が互いのよさを認め合い、自分の成長に気付きながら、自己向上力を育む学級づくりを進める。
	③ 児童の主体的な活動を育む支援体制の強化	自信と希望をもって中学校に進むためには、自分で自分を育てるという主体的な態度を身に付ける学びが必要である。そのために、学校行事や児童活動への支援体制を強化していくことが第3の柱になる。 ・学校行事、学年・学級行事、児童会活動等を、児童が自分たちで考え、協働して実行し、自分たちの活動を振り返り、次の活動につなげるように位置付けることで、児童の主体性を育てる。 ・異学年交流や異校種交流、地域の交流等、さまざまな交流活動を通して、自分の成長を実感するとともに、自分で自分を育てる主体性を伸ばす。
	④ 地域の方々とともに地域愛を育む教育活動の構築	地域の一員として自立した大人になるために、地域愛や感謝する心を育み、ふるさとに誇りをもち地域に貢献しようとする心が育つ学びが必要である。そのために、伝統文化の盛んな吉浜地区の強みを生かし、地域の方々とともに児童を育む教育体制を整えることが第4の柱となる。 ・地域への感謝や貢献しようとする心を育む活動を、地域の方々や意思の疎通を図り、教育課程に位置付ける。 ・学校だより・学年だより・ブログなどで、学校から保護者や地域に積極的に情報発信するとともに、地域、保護者の方々の意見を学校運営に生かし、協働して学校づくりを進める。

経営方針	中期経営目標	短期経営目標	目標達成のための方策	成熟度による成果指標	取組指標 概ね8割以上の達成でA 6割以上の達成でB それ以下はC
① 授業力が向上する主題研究体制の構築	深めていく授業ができていく。児童が関わり合いながら話し合い、自分の考えを	児童が、主体的に学びを深めようとしているとともに、学級全体での話し合い活動（＝建設的相互作用のある対話：役割を交代しながら一人一人が自分なりに納得できる解を見いだす対話）を通して、学びを深める授業ができていく。	<ul style="list-style-type: none"> 全体授業研究を2回、各学年の代表による公開授業を1回行い、主体的・対話的で深い学びが実現できる授業のあり方を研究し、各学級で実践する。 	全体研究のマネジメント 三段階 2回の全体授業では、前回の反省点を生かして次の全体授業を行い、主題研の目標にせまっている。 二段階 2回の全体授業では、前回の反省点を生かして、次の全体授業を行っている。 一段階 前回の反省点を生かせないまま、次の全体授業を行っている。	<ul style="list-style-type: none"> 学年に応じて、児童が、学級全体での対話を通して、知識を関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりして、学びを深めている。（活動の様子・教員による分析）
			<ul style="list-style-type: none"> 「教員の自己評価3段階」を念頭に置き、自分の指導を振り返りながら、次の段階を目指して授業を進める。 	自己評価3段階の活用 三段階 自己評価3段階を主題研究とかかわらせ、組織的に活用している。 二段階 個々の教員の指導力アップに生かしている。 一段階 評価だけして、指導力アップに生かされていない。	<ul style="list-style-type: none"> 8割以上の教職員が、中堅以上のレベルに達している。（教員の自己評価）
			<ul style="list-style-type: none"> 朝の読書を継続し、児童の語彙や視野を広げる。 主体的・対話的な「学びの流れ」をデザインした単元により授業を進める。 「聴き方名人」「話し方名人」を意識し、指導を進め、建設的相互作用のある対話の基礎をつくる。 スピーチ活動を計画的に行い、対話のスキルを向上させている。 	主題研究で目指す授業の基礎づくり 三段階 学びの流れをデザインした単元による授業の中で、建設的相互作用のある対話により、学びを深める児童の姿が見られる。 二段階 学びの流れをデザインした単元による授業の中で、話し方名人や聴き方名人などの対話の基礎を生かして、学びを深めようとする児童の姿が見られる。 一段階 学びの流れをデザインした単元による授業を進めているが、学習の基礎が不十分で、対話による学びの深まりが見られない。	<ul style="list-style-type: none"> 読書により、語彙や視野を広げ、自分の考えをもつ基礎づくりになっている。（活動の様子・児童アンケート） 役割を交代しながら一人一人が自分なりに納得できる解を見いだす建設的相互作用のある対話により、学びを深める児童の姿が見られる。（活動の様子・児童アンケート） 単元構想を工夫した授業を進める中で、児童が身を乗り出して学ぼうとしている。（活動の様子・教員による分析）
			<ul style="list-style-type: none"> 学級の現状を捉えながら、課題と目標を明確にし、自己向上力のある学級にするためのシステムを学級経営案に示す。常にPDCAサイクルを活用して学級経営を進める。 児童にとって居心地のよい安心な場所となる学級に育てるため、さまざまな交流活動等を行い、互いのよさを認め合ったり、自分の成長に気付いたりしながら、自己向上力を育む学級づくりを進める。 	PDCAサイクルを活用 三段階 目標管理により、半期ごとはもちろん、常にPDCAサイクルで学級経営を進めている。 二段階 目標は定めているが、前期の反省を後期の経営に生かしていない。 一段階 目標管理による学級経営ができていない。 成長に気付き、自己向上力を育む学級経営 三段階 児童が互いのよさを認め合い、自己向上力を育む姿が多く見られ、居心地のよい学級となっている。 二段階 児童が互いのよさを認め合う姿が見られ、概ねどの児童にも居心地のよい学級である。 一段階 児童が互いを認め合う姿があまり見られず、学級のよい人間関係ができていない。	<ul style="list-style-type: none"> 担任の思いが児童に伝わり、学級目標を意識しながら、安定して授業の質を高められる学級の姿になっている。（教員自己評価・児童アンケート） 児童が互いのよさを認め合い、自分の成長に気付き、自己向上力を育みながら、更に居心地のよい学級にしようと主体的に活動している。（活動の様子・児童アンケート） いじめ防止の意識が高く、仲間を理解し合える人間関係ができていく。（教員自己評価・児童アンケート）
② 目標管理による学年・学級経営の展開	卒業時の姿を見据えた学級経営ができていく。児童の六年間の成長の中で、今の学年の位置を考え、	学年末の児童のあるべき姿を目標として、次の学年につながる学級経営ができていく。	<ul style="list-style-type: none"> 学級の現状を捉えながら、課題と目標を明確にし、自己向上力のある学級にするためのシステムを学級経営案に示す。常にPDCAサイクルを活用して学級経営を進める。 児童にとって居心地のよい安心な場所となる学級に育てるため、さまざまな交流活動等を行い、互いのよさを認め合ったり、自分の成長に気付いたりしながら、自己向上力を育む学級づくりを進める。 	PDCAサイクルを活用 三段階 目標管理により、半期ごとはもちろん、常にPDCAサイクルで学級経営を進めている。 二段階 目標は定めているが、前期の反省を後期の経営に生かしていない。 一段階 目標管理による学級経営ができていない。	<ul style="list-style-type: none"> 担任の思いが児童に伝わり、学級目標を意識しながら、安定して授業の質を高められる学級の姿になっている。（教員自己評価・児童アンケート） 児童が互いのよさを認め合い、自分の成長に気付き、自己向上力を育みながら、更に居心地のよい学級にしようと主体的に活動している。（活動の様子・児童アンケート） いじめ防止の意識が高く、仲間を理解し合える人間関係ができていく。（教員自己評価・児童アンケート）

<p>③ 児童の主体的な活動を育む支援体制の強化</p>	<p>各行事・各活動が、児童自ら推進していることを実感できるものになっている。</p>	<p>学校・学年行事、児童会活動、委員会活動、学年・学級活動などが、児童自ら企画し、協働して実行し、振り返り、次の活動につなげる主体的な活動になっている。</p>	<p>・学校・学年行事、児童会活動、委員会活動、学年・学級活動などを、児童の考えで企画・運営した活動を、自分たちで振り返りながら次の活動につなげていく。</p>	<p>児童が主体的に活動する行 事や児童活動</p>	<p>三段階 児童が自分たちの考えで活動を進め、振り返りを次の活動に生かしている。 二段階 児童が自分たちの考えで活動を進めているが、次の活動へのつながりが無い。 一段階 教員主導の活動になっている。</p>	<p>・児童の考えが行事や活動に生かされ、やり遂げた満足感と自信をもつことができている。そして、振り返りを次の活動に生かし、更に主体的に活動する姿が見られる。 (活動の様子・児童アンケート)</p>
<p>④ 地域の方々とともに地域愛を育む教育活動の構築</p>	<p>ふるさとに誇りをもち、地域の方々に感謝する心をもつとともに、地域に貢献しようとする児童を、学校と地域が協働して育てている。</p>	<p>ふるさとに誇りをもち、地域の方々に感謝する心をもつとともに、地域に貢献しようとする児童を、学校と地域が協働して育てている。</p>	<p>・生活科の野菜作りや町探検、菊の一人一鉢栽培や菊人形作りなど、地域のよさや伝統文化を学ぶ活動において、地域の多くの方々と学校が意思の疎通を図り、活動の意義を明確にして取り組む。</p>	<p>地域と協働による授業づくり</p>	<p>三段階 地域の多くの方々と学校が協働して児童を育むことができる活動を教育課程に位置付けている。 二段階 地域の方々と活動は行われているが、地域または学校の一方的な考えで行われている。 一段階 地域の方々と活動があまり行われておらず、十分な意思の疎通もされていない。</p>	<p>・教職員や仲間だけでなく、来客や地域の方にも、丁寧なあいさつや対応ができている。 (活動の様子・児童アンケート)</p> <p>・各学年での地域活動により、地域を理解し、誇りに思うとともに、地域の方々に感謝し、地域に貢献しようとする心をもつ児童が育っている。 (活動の様子・児童アンケート)</p>
<p>⑤ 多忙化解消にかかる業務改善</p>	<p>業務改善が進み、児童に向き合う時間の確保が進んでいる。</p>	<p>地域で心豊かな児童を育てるために、学校だより、学年だより、ブログなど、学校からの情報発信に努めるとともに、地域、保護者の意見を学校運営に生かしている。</p>	<p>・各種たよりやブログを定期的に発行する。 ・PTA理事会、学校関係者評価委員会、保護者アンケートなどで、学校に対する意見を収集する。 ・防災・防犯に関する学校の取組に、地域の協力が得られるよう計画する。</p>	<p>学校づくりに生かす情報発信</p>	<p>三段階 保護者、地域の方に学校の情報発信し、また保護者、地域の意見を学校運営に生かしている。 二段階 情報は発信しているが、保護者、地域の意見を学校運営に生かしていない。 一段階 情報を十分に発信せず、保護者、地域の意見を学校運営に生かしていない</p>	<p>・教職員、保護者、地域の方が、地域に開いた学校であると感じている。 (保護者アンケート、教職員アンケート、学校関係者評価等)</p> <p>・児童の安全のために、防災や防犯活動を、保護者やまちづくり協議会、町内会と協力して進めている。 (学校関係者評価、活動の様子)</p>
<p>⑤ 多忙化解消にかかる業務改善</p>	<p>業務改善が進み、児童に向き合う時間の確保が進んでいる。</p>	<p>行事の見直しや会議の削減等による業務改善を進め、教員の在校時間の減少や有給休暇の取得を促し、多忙化解消が進み、児童に向き合う時間の確保が進んでいる。</p>	<p>・昨年度に引き続き、行事や会議を見直し、無駄な時間の削減を進める。 ・教員一人当たりの有給休暇年間取得数15日以上を目標として示す。 ・教員一人当たりの在校時間月平均80時間以上の人数はゼロを目標として示す。 ・働き方改革に関する学校の取組に、PTAを通じて地域の協力が得られるようにする。</p>	<p>業務改善による有給休暇年間取得数の増加</p>	<p>三段階 教員の在校時間月平均80時間以上の人数がゼロである。 二段階 教員の在校時間月平均80時間以上の人数が1割以内である。 一段階 教員の在校時間月平均80時間以上の人数が2割以上いる。</p>	<p>・教員が多忙化解消とともに、児童に向き合う時間の確保がなされていると実感している。(教職員アンケート)</p> <p>・校内外で教員の働き方改革についての理解が進んでいる。 (学校関係者評価、教職員アンケート)</p>